老　孃

岡田美知代

朝起きるから如何もむかくして、頭が重い。何うかすると吐きさう

な氣もする。大した事は無いと云ふに阿母さんが何日の間にか三玉先生を迎へて、是非見て貰へと仰有る。胃弱で、去年の秋のチブス以來腸も少々荒れて居るから、暫く服藥するやうにとの事。何うにも氣が重くて、何一つする勇氣もない。午飯後梅日和のお天氣はよし、散歩かたがた川向ふの其枝さんのところへ出掛けた。丁度食事中なので、川傍に日向ぼつこをしながら待つて居る。家鴨が四羽下流から眞直ぐに列を立てゝ上つて來て、時々水の中に引くり覆つて、見て居ると面白い。それに樺色の脚が水から透いて非常に美しい。と、

「角田のお嬢さん！」

と誰かゞ背後で呼んだ。振返つて見ると五つばかりの女の兒、何處か其處いらの小家の者の子と見えて、繼ぎはぎの汚ない着物を着て、帶もせず、色つぽい格子縞の、紀州子ルのはげちよろげた前掛けをしめて居る。色の黑い鼻の低い、如何にしても醜い散蓮花式ではあるが、黑くなつた蟲齒を出して無邪氣に笑ひ掛けられては、つい會釋を返したばかりでは居られぬ。

「好い兒だれ、お前幾つなの？」

「私五つ」

「然う、何て名前？」

それには答へず、いきなり私の袂をかへして、

「まあ奇麗な襦袢着とつてちやが、お嬢さん、これ不斷着か？」ときく。女の子だけに、紅入りめりんす友仙の派出つぽいのが目について、羨ましうも思つたのであらう。

「お前赤いの好きかい？今日は何も無いけども、又今度お襦袢の襟持つて來て上げようね、赤でも紫でも淺黄でも、何でもお前の好きなのを云つて御覽、れえ、何が一番好いの？」

「私、お嬢さんのやうなのが好い。」

「ホ、、然うかい。」

「お喜代さん、お待せしました、お上んなさいね、最う濟んでよ。」

其枝さんが出窓から目ばかり出してお呼びなさる。

「ばい今行きます。ではお前又れ、あばよ。」

内に入つて格子戸を閉めても、彼の子はやつぱり突立つた儘、此方を見て居るので、何だか可哀相にもなつたが、其枝さんが出迎へて下すつたので、其儘奥へ通つた。奥には白の晒木綿だの、淡紅色モスだのが其處ら一杯散らかつて居る。

「何てすか、お仕事」

「いゝえ、散らかして、御免なさい、これね大急ぎで裁つたのよ。」

「アラ然う、何？お手傳ひしますわ、あなた襟はずなすつて項戴。」

「ナニね、最う好いのよ。」

「虚言？それぢや私歸つてよ。」

「アラーそれぢやしますから……私ね急に忙しくなつて困るのよ。」

「如何して？」

「あのね、近いうち旅する事になつたの……。」

「まあ然う、何處へ？廣島？」

「いゝえ、何處でも無い、云はれない處よ。」

「何處でも無い、云はれないところつて、隨分可笑しいのね。」

「フ、、今に解つてよ」

「好いわもう、どうせ小母さんに聞きますからね。」

「きいたつて駄目、教へやしないわ。」

「然う。」

「ねえお喜代さん、あなた何時か丹波がお好きだつて仰有つてね。」

「えゝ云つてよ、如何して？」

「如何もしないけ共れ、何樣なところ？」

「何樣な處つて一口に云へやしないわ、だけどもね。それは本當に言葉が可愛いのよ。」

「然う、私丹波に住むかも知れなくつてよ。」

「あつ解つた、あなたお嫁にいらつしやるのね。」

「然うかも知れません……」と流石に少しく頰が赤らむ。

「道理でお襦袢なんか裁つてらつしやる、而して何時頃？」

「え？」

「おらお輿入れぢやありませんかよ。」

「嫌、其樣に冷かしちや、多分四月の中旬でせう。」

「まあ何しろお目出度う。」

「可いわ、貴嬢東京へいらつしやるんでせう、何時？

「サア何時ですか。」

「私れ丹波へ嫁つても又直ぐ都會へ出る筈ですから、東京へ行つたら是非貴嬢の處へ遊びに行つてよ。」

「何卒！ですけ共まだ私何時行くんだか行かんのか、解つたもんぢやありませんのよ。」

「私だつて解りやしないわ、併しれ東京か京都か大阪か、兎に角田舍にや居ないの、それでなくちや私嫁きあしませんわ。」

「よ御座んすれ。」

「け共阿母さんがあるんですつて、嬉れえ。」

「だつて誰だつて親の無い人居やしないわ。」とつい此樣な事も云ひ度くなる。

「そりや然うだけ共八釜しい阿母さんで居て御覽なさい、私の樣な我儘者はとても勤らないんですもの……」

「だから二人で都會へ逃げ出すのれ。」

「アラ酷い、まあ本當に何て口がお惡いんでせうれ、今お口なほしに御馳走してよ。」

「最う澤山！幾ら御馳走して頂いたつて口のせいぢやありません、全く私胃が惡いんだから駄目。それぢや左樣なら、お忙しい處をお邪魔して濟みません。」

「アラ些ともお邪魔な事ないわ、もつとお話なさいよ。」

「否、また上ります。」

「おや如何しても……！」

「え、左様なら。」

表へ出ると直くペッペッと唾を吐き掛け度かつた、

「驚いた、よくまあ自分で耻しくもなく彼様な事が云へたもんだ、丸で宇頂天なんだよ可笑しくなる！」

併し考へて見ると無理もない、其枝さんも若う老嬢なんだ。元々他郷から來た人で確とは解らぬけれど、何時かの話にフェリスを出て最う丁度十年よと仰有つた。して見ると十八で卒業したとして二十八か——彼の小供らしさで眞逆とも思はれるけれど、併し凝然と斯う顔を見据ゑて居ると、緊ずんだ眼の邊りから額の具合、中々年食ひらしい處がある、が兎に角小柄で色白で鼻筋も些と高過ぎる位通つて、何方かと云へば愛嬌つ氣の無い顔ではあるが、彼の位なら先づ一通り美人の方だ。それだのに何故今迄縁遠くて居たのだらう。一生幼稚園事業のため獨身で通すとか何とか、あれで居て最初すばらしい決心があつたのかも知れぬ。それが段々年をとるにつれて、何處か斯う頼り無いやうな、心元無さ淋しさに堪らなくなつて、急に結婚して見度くなつたのだらう、女は誰だつて皆な然うだつて云ふから屹度然うに違ひない。女學院の三田先生でも、大房先生でも、三十幾つになつて終に結婚なすつたんだ、二人共洋行歸りの立派に教師で通れるものを、老嬢の悲しさに、御自分よりもずつと學問の無い氣の毒な糧安つぽい御亭主を持つてちつしやる——と云つて人事では無い、私だつて今に老嬢なんだ、いや現に最う老嬢と歌はれる部類かも知れぬ。嫌だ嫌だ、考へると全く嫌になつて了ふ。昨日も新詩文の現代文學者小傳を讀んで、かきむしる様な思ひに泣いた。だつて皆様皆な驚く程お若いんだもの青果氏白島氏二人共やつと三十！其他有力な新進作家で居て、中には私と餘り年の違はぬ方もある。それだのに私は如何か、女の二十は男の三十以上に當るつて云ふぢやないか、嫌だ嫌だ、私は何故斯う馬鹿なんだらう、馬鹿！確かに馬鹿だ。一業女史は二十四五で彼様も勝れた作をお遺しなすつた。私だつて今死んでも好い、何か一つすばらしいものが書き度いけれど、年中青い顔して藥ばかり服んで居て何が出來る。

「死れ、死れ！」と口に出して自らを罵つた。而して今更頼り無い自己の才能を思ひ、病身な體を厭みて、考へれば考へる程苛立しく頭は愈々痛み胸は鉛のやうに重苦しくなり增るばかりで、悲しいやうな憤ろしいやうな、何とも云へぬ遣瀬無さに思ひ限り大聲擧げて狂人のやうに泣き叫んでも見度くなる。

▲老嬢（備後、岡田美知代）　老嬢と、老嬢を見て自分もやがて老嬢たるべき身なるを思つて泣いたといふ文學好の女を書いた。主人公が客觀して無いので、何となく物足らぬ。平面のやうな氣がする。今少し傍に立つて書いて見たら好からう。文章は達者だ。

懸賞小説の評

選者